

國學院大學学術情報リポジトリ

中古、中世和文における離れる移動を表す動詞の起
点、離点の標示

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-28 キーワード (Ja): 移動動詞, 離れる移動, 起点, 離点, 格助詞「を」「に」「より」 キーワード (En): 作成者: 松本, 昂大 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000971

中古、中世和文における 離れる移動を表す動詞の起点、離点の標示

松本 昂大

キーワード：移動動詞、離れる移動、起点、離点、格助詞「を」「に」「より」

はじめに

古代語の起点標示を担う格助詞には「を」「に」「より」の3種があるが、一つの動詞が「を」と「に」、「を」と「より」など複数の形式を承けることがある。

(1) のがれがたくていまはと思ふに、年経つる浦^を離れなむことあればに、……
(20- 源氏1010_00018・②松風 p.401)

(2) これは、源氏の御族^{にも}離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の……
(20- 源氏1010_00044・⑤竹河 p.59)

「別る」「離^{はな}る」などは、従来「を」「に」の使い分けが論じられてきたが、いまだ明確な使い分けが示されていない。これらの動詞は、起点との結びつきが強い動詞であると考えられるが、「ある場所または状態からいなくなる」という移動や「移動する動作の主体がある対象からある程度距離を取る」という移動を表す動詞は、ほかにも「のく」「遠ざかる」や出発の意味を表す「立つ」なども考えられる。本稿では、このような「離れる移動」を表す移動動詞を中古から中世にかけて採集し、それらがどのような場所格を承け、どのような格標示を行うのかについて調査する。さらに、複数の格助詞を承ける場合には、その使い分けについて明らかにすることを目的とする。また、本稿では暫定的に「起点」という語を用いるが、「おわりに」で名称について

の検討も行う。

1. 先行研究

格助詞「を」「に」が起点を表すことは、夙に指摘されているが、その使い分けについては、特に中西（1996）と工藤（1978）において論じられている。中西（1996）は「別る」について、万葉集、古今和歌集、源氏物語などから得た用例を挙げ、「「人に別る」の表現をとるのが一般である」とし、「「人に別る」の場合は、その状況のままにそれに従って相手の人に別れるのであり、「人を別る」の場合は、別れることの場合がそこにあるにしても、ただそれに従うのではなく、むしろ主語の方からそれを積極的に押しすすめて別れるのである。」と述べている。注意したいのは、「別る」の主体と相手のどちらが移動を行うかという点は使い分けの基準にはならないということである。

（3）天雲のそきへの極み我が思へる君に別れむ日近くなりぬ

（万葉・十九・四二四七）

（4）たらちねの母を別れてまことわれ旅の仮庵に安く寝むかも

（万葉・二十・四三三八）

（5）あふさかにて人を別れける時よめる

（古今・離別・三七四・詞書）

（6）むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな

（古今・離別・四〇四）

（3）には「阿部朝臣老人、唐に遣はされし時に、母に奉る悲別の歌一首」、（4）には「天平勝宝七歳乙未の二月に、相替わりて筑紫に遣はさるる諸国の防人等が歌」という詞書がついていることから分かる通り、移動を行うのは、「別る」の主体である。一方（5）は「あふさかの関しまさしきものならばあかず別るる君をとどめよ」という歌の詞書であり、また（6）には「しがの山ごえにて、いしゐのもとにて物言ひける人の別れけるをりによめる」

という詞書がついていることから「別る」の主体ではなく、その相手が移動しているということが分かる。どちらの場合にも「に」「を」の例が見られる。このように、中西は移動の主体ではなく、「別る」という移動を、主体が積極的に押し進めているかどうかによって「に」「を」が使い分けられていると述べ、「離る」についても同様の基準で説明している。

工藤（1978）は源氏物語の「離る」の以下の例について「女親との死別であつたり（7）¹、源氏一族との縁がなくなることであつたり（8）、血縁が切れることであつたり（9）した」（用例番号は筆者による）と述べている。

（7）「……。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。……」

（20- 源氏1010_00044・⑤竹河 p.59）

（8）これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の……（（2）再掲）

（9）我も、故北の方には離れたてまつるべき人かは、……

（20- 源氏1010_00050・⑥東屋 p.42）

これらに「を」ではなく「に」が用いられていることについては、「己れの意志ではいかんともしがたい状態で何かが離れることを表わしたと言えようか」と述べている。しかし、以下のような例はどうであろうか。

（10）親しき人々いみじう忍びて下し遣はす。のがれがたくていまはと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、……（（1）再掲）

（11）「……。今日明日とも知らぬ身の残り少なさに、さすがに、行く末遠き人は、落ちあぶれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れん際の絆なりけれ」（20- 源氏1010_00045・⑤橋姫 p.159）

（10）は明石の君が源氏の意志で京に移される場面であり、明石の君の意志で移動するのではない。また「のがれがたくて」とあるように、浦を離れ

ることは、己の意志ではいかんともしがたいと言える。また、(11)は八の宮の発話であり、生い先の短い自分にとって娘たちのことだけが気がかりであると述べる内容である。「世を離れる」は発話者自身の死を意味しており、これもまた自らの意志ではどうにもできない移動である。むしろ、(7)～(9)のような「に離る」は、ある対象とはじめから疎遠であることを表しており、物理、抽象の別を問わず、ある場所や事物から離れるというような「移動」を表しているのではないという点に注目すべきかと思われる。さらに工藤は「心に離れる」という例が「いずれも否定的な意味・構文に用いられている」ということも指摘しているが、これらは「忘れられない」「気がかりだ」というような意味を表しており、同様に、移動を表しているとは言えないものである。

(12) 「……。ふさはしからぬ御心の筋とは年ごろ見知りたれど、さるべきにや、昔より心^に離れがたう思ひきこえて、……」

(20- 源氏1010_00039・④夕霧 p.484)

(13) ……、ほのかにも御声をだに聞かぬことなど、心^に離れず思ひわたりつるものを、……

(20- 源氏1010_00040・④御法 p.508)

このような「離る」「別る」の「を」「に」の使い分けについては、再検討の余地があると思われる。また、いずれも中古までの資料の調査にとどまり、中世以降の和文資料の調査が行われていない。『日本大文典』（土井忠生 訳注（1955）p.381）には「Ni（に）のつく与格か Vo（を）のつく対格かを要求する中性動詞」という項目があり、「離るる」「別るる」「去る」という移動動詞と例文として「父母に離るる」「不断お側を離れず」という文が挙げられていることから、中世にも使い分けの意識は存在していたと考えられる。

また、中古和文の移動動詞の起点、経路の格標示について調査を行った松本（2016）は、「出づ」を「出現」と「出発」という2つの移動に分け、「動作主が「出づ」という移動を行った後、別の場所へ移動したことが読み取れる場合」の「出づ」を「出発」を表すものとした。そのうえで、『今昔物語集』

および中古、中世の和文を対象として「より」と「を」に下接した「出づ」が「出現」と「出発」のどちらを表すか、その例数を調査している。その結果、「出現」を表す場合は「より」、「出発」を表す場合は「を」と結びつくという傾向が見られるということを指摘した。この「出づ」のように、「を」と「より」の両方を承ける移動動詞はほかにないか、その場合、「を」「より」の使い分けの基準はどのようなものか確認する必要がある。

以上、「別る」「離る」「出づ」に注目した先行研究について見てきた。いずれも、起点標示の一つに「を」が用いられ、「離れる移動」を表す動詞について検討されている。本稿では、このような離れる移動を表す動詞と共に「を」「に」「より」について、中古から中世の和文における通時的な分布状況とその使い分けを明らかにしていく。

2. 調査方法

本稿で調査資料とした中古和文作品は、古今和歌集、土佐日記、竹取物語、伊勢物語、落窪物語、大和物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、平中物語、堤中納言物語、更級日記、讃岐典侍日記、蜻蛉日記、大鏡である。鎌倉期は方丈記、宇治拾遺物語、十訓抄、徒然草、海道記、建礼門院右京大夫集、東関紀行、十六夜日記、とはずがたり、室町期は、虎明本狂言集、天草版伊曾保物語、天草版平家物語である。

調査対象とする動詞は、まず宮島ほか(2014)にて、意味分類に「出沒」「消滅」「除去」「固定・傾き・転倒など」「移動・発着」「進退」「往復」「出入り」「出・出し」「入り・入れ」「乗り降り・浮き沈み」「分割・分裂・分散」「接近・接触・隔離」が付与された動詞を抽出する。そのうち、敬語動詞、複合動詞(ただし、「たまふ」など移動動詞由来でない敬語補助動詞が下接した例は対象とする)を除外する。残った動詞の用例を、国立国語研究所(2021)『日本語歴史コーパス』を用いて採集し²、採集した用例の中に起点を表す「を」を承けた例が1例以上見られた動詞を本稿の調査対象とした。対象とする用例は、物理的な移動に限らず、抽象的な移動も含む。また、(14)のように、代名詞に「より」が下接した場合は、時間的な起点を表す場合があるので、

代名詞が確実に場所を表していることが分かる例以外は起点標示の用例数に含めない。

(14) 春日へとて、宿院のいとむつかしげなるにとどまりぬ。それより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。(20- 蜻蛉0974_00007・p.260)

以上の選定の結果、調査対象とする動詞は「落つ」「去る」「かる」「立つ」「遠ざかる」「のがる」「のく」「^{はな}離る」「別る」となった。

3. 起点以外の場所格を承けない移動動詞

本節では、起点の場所格を承ける動詞のうち、経路や着点などの起点以外の場所格を承けることがない、または極めて少ない動詞について見ていく(中世の「のく」は起点以外を承ける例が多いが、これについては後述)。以下は移動動詞と起点の結びつきを示した表である。格助詞に係助詞・副助詞が承接した場合は、それぞれの格助詞の例に分類している。

表1. 中古における「離れる移動」と場所格の結びつき

	用例数	起点					起点以外
		無助詞	係助詞 副助詞	を	に	より	に
別る	74			9	4		
離る	121	11	5	23	15	1	1
去る	94	2		16			
のがる	36	4	3	6			1
のく	13	3		1			
かる ³	9			4			
遠ざかる	3			1			

表2. 中世における「離れる移動」と場所格の結びつき

	用例数	起点				起点以外	
		無助詞	係助詞 副助詞	を	に	に	へ
別る	42	1		4	10		
離る	33		2	9	12		
去る	52			8			
のがる	49	6	1	16			
のく	104	12					24
遠ざかる	9		1		1	2	

3.1 「別る」

表3. 「を別る」「に別る」が承ける起点の種類

	を	に
中古	人：3 場所：6	人：4
中世	場所：4	人：9 場所：1

(15) ……、京^を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、…… (20- 源氏1010_00012・②須磨 p.212)

(16) ……、つひにかくあひ見ず隔てながらこの世^を別れぬるなむ、口惜しくおぼえはべる。 (20- 源氏1010_00034・④若菜上 p.119)

(17) 院^に別れたてまつらせたまひしほどは、……

(20- 源氏1010_00019・②薄雲 p.443)

中古の「別る」の「を」は、人を承ける場合が3例、場所を承ける例が6例あった。場所を承ける例には(16)のように「世」を承けて「別る」の主体の死と出家を表す例が1例ずつ見られる。一方、「に」は工藤(1978)の指摘の通り、「院」や「頼む蔭ども」など人を表す名詞句を承け、すべて死別⁴の例を表す。また、「に」の用例は源氏物語にしか見られず、「を」と比べると使用が限定的である。

中世になると、「を」は場所のみを承け、人を承ける例は見られなくなる。一方、「に」は、ほとんど死別の例に限られるが、物理的な別れも 2 例（(19) (20)）見られた。

(18) 本の都の国を別れて、仮の宿にふせり。(30- 海道1223_00013・p.77)

(19) 年も長け、齢傾いて後、妻子にも別れ、見送る人も無うて、越路の旅へ赴かせられた心の内は哀れな事ぢゃ。

(40- 天平1592_04024・p.371)

(20) ……恨めしや老いた親にも別れ、幼けない嬰兒をも振り捨て、これまで付きまらして下った甲斐も無う、……

(40- 天平1592_04010・p.283)

(19) (20) は、どちらも今生の別れを意図した表現ではあるが、「別る」の主体が移動するため、相手が死去する「死別」とは異なる。また、場所を承ける例も 1 例見られたが、「ここに別れぬ」「かしこに生れぬ」と対句的な表現であり、特殊な例と言える⁵。

(21) 死ぬと思ふは、旅に出づる行客の宿に泊るが如し、ここに別れぬと云へども、かしこに生れぬ。

(30- 海道1223_00011・p.65)

このことから、「別る」は中世以降、上接語が人の場合は「に」、場所の場合は「を」という使い分けの意識が生まれたと考えられる。また、無助詞を承ける例は以下の 1 例であった。中世の例で場所を承けているため、無助詞は「を」に近いと考えられる。

(22) 見し人々の都 の別ると聞きし秋ざまのこと、とかく言ひても思ひても、心も言葉も及ばれず。

(30- 建礼1232_00010・p.99)

3.2 「離る」

前述したように、「離る」は移動を表すものと、移動を表さないものに分けることができる。「を」と「に」が承けた例を分類すると以下の表のようになる。

表4. 中古の「を離る」「に離る」と共起する起点の種類

	を	に
移動を表すもの	場所 : 13 人、有情物 : 4 その他 : 3	
移動を表さないもの	その他 : 3	場所 : 1 人 : 5 その他 : 9

※「その他」は物（非情物）、抽象的な概念、身体の一部など

(23) のがれがたくていまはと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、…… ((1) 再掲)

(24) いとどさびしき住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて思ふらむことの心苦しければ、……

(20- 源氏1010_00019・②薄雲 p.437)

(25) 月さし出でて曇りなき空に、翼うちかはす雁がねも列を離れぬ、…… (20- 源氏1010_00037・④横笛 p.354)

まず、移動を表すものの例を見ると、上接語が場所の例や人や有情物（「列」などの集団を表す語も含む）である例が見られる。いずれも物理的な移動である。

(26) ましてかく、今はとこの世を離るる際にて、ことごとしく思ふべきにもあらねど、…… (20- 源氏1010_00034・④若菜上 p.48)

(27) 「……罪を離れむとて、かかるさまにて、久しくこそなりにけれ」 (20- 堤中1055_00001・p.475)

(28) 聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる

心地す。

(20- 源氏1010_00035・④若菜下 p.229)

(26)～(28)は抽象的な移動ではあるが、「世」「罪」「身」から離れるという意味では移動や状態の変化を表している⁶。一方、移動を表さないものの例は、先に挙げた(7)～(9)のように、「人」を承ける例が代表例ではあるが、それ以外にも以下のような例がある。

(29) およばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、……

(20- 源氏1010_00045・⑤橋姫 p.140)

(30) 「いと多かめる列に離れたらむ後るる雁をしひて尋ねたまふがふくつけきぞ。……」

(20- 源氏1010_00026・③常夏 p.225)

(29)は新全集の頭注に「琵琶の撥を収める箇所を「隠月」と呼ぶ」とあり、琵琶が雲から出てきた月に「縁がある」ということを述べている。(30)は(25)と同じく「列」を承けているが、子どもたちを雁に例えた話であり、新全集では「ずいぶんお子たちがおられるのに、列から離れてとり残された雁を無理にお捜しになるのは欲深ですよ」と訳されている。今遅れたというよりも、はじめからある基準から外れている子であるという状態を表している。現代語では上のように様々な訳が考えられるが、あらかじめ縁がない(ある)状態にあることを表し、移動や変化を表さないという点は共通している。

また、移動を表さないのものは「縁遠い」という以外にも以下のような例が見られる。

(31) ……、ほのかにも御声をだに聞かぬことなど、心にも離れず思ひわたりつるものを、……

((13) 再掲)

(32) 殿も、こなたかなたにかかる物どもの散りつつ、御目に離れねば、……

(20- 源氏1010_00025・③螢 p.210)

(33) ……、なほこの領じたりける物の身に離れぬ心地なんする、この

あしき物の妨げをのがれて、…… (20- 源氏1010_00054・⑥夢浮橋 p.377)

(34) ……、いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらむ、と思すに、…… (20- 源氏1010_00036・④柏木 p.310)

(31) は心の中から離れず「忘れられない」「気がかりである」という意味を表し、このような例は5例見られた。(32)の「目を離れず」は「目につく」という意味で、「心に離る」の類例と考えられる。(33)(34)は祟りについて述べている例であり、「身」「ここ(=この人)」の中に霊が存在しているということを表す。これらの例は、打消し、否定表現とともに用いられ、移動を表すのではなく、「忘れられない」「憑依」などの特別な意味を表す。また、「より」を承けた例は以下の1例のみである⁷。

(35) みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、……

(20- 源氏1010_00034・④若菜上 p.34)

新全集では「当人の気持ちとはかかわりなく事が運ばれてよいはずのものではないにしても、本人の意志がそこにないままに縁を結んで、……」と訳されている。後ろに「みづからの心より」と「思ふ心より」が連続し、自らの意に沿わないことを表しているように思われるが、孤例であるため、この「より」の意味については、明らかでない。

移動を表さないもののうち、「を」を承ける例は以下の3例である。

(36) 琴の音を離れては、何ごとをか物をととのへ知るしるべとはせむ。

(20- 源氏1010_00035・④若菜下 p.199)

(37) ……、さる木高き松風に吹きたてたる笛の音も、(中略)、琴にうち合はせたる拍子も、鼓を離れてととのへとりたる方、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごおもしろく、……

(20- 源氏1010_00035・④若菜下 p.171)

(38) 右の大殿、致仕の大殿の族^を離れて、きらきらしうきよげなる人はなき世なりと見ゆ。
(20- 源氏1010_00044・⑤竹河 p.96)

(36) は『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の「離れる」の項の「除かれる。除外する。」という意味の例文として挙げられており、「琴の音を除いて、何を、音を奏でる基準とすればいいのか」という意味になる。(37)は「太鼓を用いず奏でる音楽が」という意味に、また、(38)は「致仕の大殿の一族を除いて、きらびやかに美しい人はいない」という意味で、このような「を離る」は「～を除いて」や「～以外に」という意味を表している。これまで見てきた「に離る」には「～を除いて」「～以外に」と解せるものではなく、「を離る」のみに見られる用法と思われる。

このように、中古の「離る」の「を」「に」の使い分けについては以下のことが言える。

- ・「に」は移動を表さない「離る」とのみ結びつく。
- ・「を」は移動を表す「離る」と結びつくことが多いが、「～を除いて」「～以外に」などを表す場合の「離る」とも結びつく。

表5. 中世の「を離る」「に離る」が承ける起点の種類

	を	に
移動を表すもの	場所 : 6 その他 : 2	場所 : 1 人 : 11
移動を表さないもの	その他 : 1	

(39) ……、何となく集ひ居て、嘆かしさをも言ひ合せつる人々にさへ^に離れて、独り居たる心の内、言はむ方なし。

(30- とは1306_01008・p.235)

(40) 二葉にて母^には離れさぶらひぬ。(30- とは1306_02002・p.291)

(41) 湯井の浜をかへり行けば、浪のおもかげ立ちそひて、野^にも山^{にも}はなれがたき心地して、……
(30- 海道1223_00012・p.73)

中世になると、移動を表すものの例が増える。まず、「に離る」の例を見ていく。(39)は物理的に離れる。(40)は死別の例である。「に」の上接語は人が多く、場所の例は(41)の1例のみである。「浪のおもかげ」とあることから、後ろの「野、山」も擬人的に表現されている可能性がある。

「を離る」の上接語は場所が多く、(43)のような抽象的な名詞の例も見られるが、人の例は見られなかった。

(42) 或る野牛己が立ち処を離れてあそこここを徘徊したが、……

(40- 天伊1593_00046・p.481)

(43) これから都へ上って妻子を見て後、妄念を離れて自害せうには如くまじいと……

(40- 天平1592_04011・p.290)

移動を表さないものの例は以下の1例のみであり、「を」が用いられている。(44)は中古で見た「心に離れず」と近い意味を表す。

(44) 如月のころは彼岸の御懺法、両院嵯峨殿の御所にてあるにも、去年の御面影身を離れず、……

(30- とは1306_03008・p.397)

このように中世においては、「離る」が移動を表すかどうかではなく、「に」の場合は人、「を」はそれ以外の場所、物、概念を承けるというように、上接語によって区別されるようになったと考えられる。中古から中世にかけて、助詞の選択の基準が動詞の意味から上接語に移ったという点では、「別る」とも並行的である。

次に、無助詞、係助詞、副助詞の例であるが、格助詞が下接しない場合は、起点か主格か判断が難しいため、場所名詞やそれに準ずるもののみを対象とした。上接語の内訳は以下のとおりである。特に、無助詞は、「移動を表すもの」に限られるため、「を」に近いものと思われる。

表6. 「無助詞／係助詞／副助詞＋離る」が承ける起点の種類

		無助詞	係助詞・副助詞
中古	移動を表すもの	場所 : 8 その他 : 11	場所 : 3 人 : 1 その他 : 1
	移動を表さないもの		
中世	移動を表すもの		場所 : 1
	移動を表さないもの		人 : 1

3.3 「去る」「のがる」「のく」「かる」「遠ざかる」

「去る」「のがる」「のく」「かる」「遠ざかる」の起点標示は「を」もしくは無助詞、係助詞・副助詞のみで、「に」「より」が用いられた例は見られなかった。

(45) 「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはす。
(20- 源氏1010_00013・②明石 p.229)

(46) 院は、げに、御位を去らせたまへるにこそ、盛り過ぎたる心地すれど、……
(20- 源氏1010_00044・⑤竹河 p.66)

(47) ……、いそがしき御政どもをばのがれたまふなりけり。
(20- 源氏1010_00021・③少女 p.38)

(48) 東宮にたちたまひて、あく所に、帥をば^の退かせたまひて、式部卿とは申ししぞかし。
(20- 大鏡1100_01026・p.141)

(49) 年ごろの蓬生をかれなむも、さすがに心細う、……
(20- 源氏1010_00005・①若菜 p.251)

(50) ……、さりとて、都を遠ざからんも、古里おぼつかなかるべきを、……
(20- 源氏1010_00012・②須磨 p.161)

「去る」は、自他同形の動詞である。(45)のように場所を承ける場合や(46)のように「位」を承ける場合は自動詞と考えられるが、人や抽象的な名詞を承ける場合や起点が示されない場合は自他の判定が難しい⁸。しかし、いず

れにせよ経路や着点など、ほかの場所格を承けない。また起点「に」も承けないという点では、先に見た「別る」「離る」よりも、「のがる」「のく」などと同様の動詞だと考えられる。

「のく」は中古には用例が少なく、上接語も「位」を表す名詞に限られていたが、中世になると、主に狂言などで固定化した言い方が見られるようになり、用例数が増えた。

(51) あいつほどやくにたたぬやつはござなひに依て、次手にせつかん
を仕る、そこ のかせられひ (40- 虎明1642_04029・上 p.582)

中世には、起点として、場所を意味する上接語を承ける例が見られるようになるが、すべて代名詞であり、また「そのけ」「そのかせられひ」のような行為要求表現に限られているため、起点との結びつきが増えたとは言っても、固定的な表現に限られる⁹。

3.4 起点以外の場所格を承けない移動動詞の特徴

本節では、経路や着点などの起点以外の場所格を承けることがない、または極めて少ない動詞を見てきた。これらの動詞の起点標示は「を」が中心であり、「に」「より」は特殊な場合限られる。また、「に」と「を」の使い分けがある動詞は、中世になると上接語が人かそれ以外かで使い分けられるようになった¹⁰。以下では、僅かではあるが、これらの動詞が起点以外の場所格を承けた例を見ていく。

(52) かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、(中略)
心やましげなり。まして東の院 に離れたまへる御方々は、年月にそへて、
つれづれの数のみまされど、…… (20- 源氏1010_00023・③初音 p.152)

(53) 葛楓木々の葉茂って心細う宇津の屋手越を過ぎ行かるれば、北
に遠ざかって、雪の白う降り積もった山が有ったをあれはいづくぞと
御尋ね有れば、…… (40- 天平1592_04013・p.300)

(54) 「内裏にのがるまじかりけり」とて出づるに、……

(20- 蜻蛉0974_00001・p.100)

上記の例では、動詞が「に」を承けているが、それぞれ、「東の院に住んでいる」「北に山が見える」「宮中に逃れられない用事がある」ことについて述べている。いずれも存在を表し、移動を表しているのではない。「に」も着点ではなく存在する場所を表していると言える。これらの動詞には着点や方向を表す「に」を承ける例は見られなかった。

(55) ……「と云てがくやのかたへのく、……

(40- 虎明1642_02002・上 p.175)

「のく」は、中世になると、方向または着点を表す「へ」を承けた例が24例見られるようになるが、それらは狂言集のト書きで、演者の舞台上の動きを指定する場合に多く用いられる。23例はト書きの例で、残りの1例も狂言集に見られる。このように、これらの動詞は「に」「へ」を承けることは少なく、「着点」「方向」を表す例は「のく」に限定的に見られるのみである。

4. 起点および起点以外の場所格を承ける移動動詞

本節では、起点だけでなく着点や方向、存在する場所なども承ける移動動詞について見ていく。これらの動詞は、3節で見てきた動詞と異なり、着点や方向を承ける例が多く見られる。

(56) 明けば尾張の国へたちなむとすれば、……

(20- 伊勢0920_00001・p.174)

(57) 箭をいと多く東ざまに射るを、いかなることぞと見れば、東三条殿に皆落ちぬと見けり。

(20- 大鏡1100_02006・p.240)

表7. 中古における場所格共起数

	用例数	起点			起点以外
		無助詞	を	より	に
立つ	492	2	8	1	55
落つ	75			9	4

表8. 中世における 場所格 共起数

	用例数	起点					起点以外	
		無助詞	係助詞 副助詞	を	より	から	に	へ
立つ	321	1	1	40		1	43	1
落つ	127			8	1	5	26	17

1 節でも述べたように、松本（2016）は、「出づ」を「出現」と「出発」という2つの移動に分け、「「出現」を表す場合は「より」、「出発」を表す場合は「を」と結びつくという傾向」が見られるということを指摘した。ここで扱う動詞についても、「立つ」は「（雲、霧、煙などの）発生」や「起立」、「落つ」は「落下」などの意味を表すが、そのほかに、後述のような「出発」「退却」の意味を表す例が見られる。

4.1 「立つ」

(58) つとめてそこ^を立ちて、東大寺に寄りて拝みたてまつる。

(20- 更級1059_00004・p.344)

(59) ……、九月十八日に福原の新都^を発って、十九日に元の都に着いて、……

(40- 天平1592_02009・p.147)

本稿では、松本（2016）にならい「動作主が「立つ」という移動を行った後、別の場所へ移動したことが読み取れる場合」を「出発」を表す例とする。(58) (59) はともに別の場所への移動が示されている。「出発」のうちの多くはこのように旅程を示すものであった。

(60) 上達部、座^を立ちて、御橋の上にまゐりたまふ。

(20- 紫式1010_00001・p.145)

(61) ……、この御前^をとく立ちなむと思へば、……

(20- 源氏1010_00035・④若葉下 p.277)

また、上接語が「座」「ざしき」や「御前」といった名詞である場合は、別の場所への移動が読み取れるものもあるが、単に、席に座っていた状態から立ち上がったということや、その場から出るということのみを表す可能性もあるので、「出発」の確例とはしなかった。「を立つ」が出発を表す例は、中古に6例、中世に33例見られた。

一方、「より」「から」や係助詞を承けた例には「出発」の確例は見られなかった。以下の(62)は上接語「座」を承けているため、前述のように、出発の確例とはしない。また、(63)は「京都へ向かう途中、鳥羽まで進んだところで、茅野太郎が樋口次郎の前に進み出て」という意味である。動作の開始地点であるが、そこから出発するわけではない。(64)は、「京都からの使い」というように使いの出自を表すと解することもできる。

(62) 「……、これに物ぬぎてとらせざらむ者は、座^{より}立ちね」とのたまひければ、……

(20- 大和0951_00001・p.367)

(63) 同じく今日京へ入るが、茅野の太郎何と思うたか：鳥羽^{から}樋口が先に立って、馬の足を早め、四塚で大勢に打ち向かうて、……

(40- 天平1592_04005・p.249)

(64) ……豊後の国に代官の心に成って居られたヨリモリと言う人の所へ、京^{から}御使いが発って……

(40- 天平1592_03010・p.201)

無助詞の例はいずれも出発と解することができるものであった。「立つ」はもともと起点標示が少ないが、「を」は出発を表す場合に用いられることが多いということがわかる。

(65) 御社 Ø 立ちたまひて、所どころに逍遙を尽くしたまふ。

(20- 源氏1010_00014・②滯標 p.306)

(66) ……、宿 Ø 立つ人の袖は、よそなる声によばはれて、……

(30- 海道1223_00005・p.34)

4.2 「落つ」

「落つ」は起点標示に格助詞「を」「より」「から」を用いた例が見られる。

(67) ……：義経吉野山にも跡を留めず、防ぎ矢射させ、吉野山 をも 落ち、その年は都辺に忍うで、…… (40- 天平1592_04026・p.381)

(68) ……、衣の裾を物にひきかけて、よろほひ倒れて橋 よりも 落ちぬ べければ、…… (20- 源氏1010_00004・①夕顔 p.150)

(67) は、戦に負け、そこから退却する移動（以下、退却と呼ぶ）を表す。「を」を承ける「落つ」は、すべて「退却」を表していた。一方、「より」「から」を承ける場合は、(68) のように「落下」する移動を表し、「退却」の例は見られなかった¹¹。

4.3 起点および起点以外の場所格を承ける移動動詞の特徴

「立つ」については、「を」以外の起点標示の例が少なく、「を」は「出発」を表す場合の起点標示に多く用いられるという傾向の指摘に留まったが、「落つ」については、「を」は「退却」を表す場合の起点標示にのみ用いられ、それ以外の場合の起点標示は「より」「から」が用いられるという使い分けが指摘できた。『日本大文典』(p.382) には「助辞 Vo (を) のつく対格を支配する中性動詞」という項目に「出づる (都を出でて) (都より出でて)」「逃ぐる (人をにぐる)」「遁がる (難を遁がる)」のように「を」を承ける移動動詞とその用例が示されているが、以下の2例は用例の他に、どのような移動かという説明（鍵括弧部分）もつけられている。

立つ「或場所から出発する」(鎌倉を立て)(都を立つ)(国を立つ)

落つる「ある所から逃げる」(平家都を落ちて)

このことから、特定の意味の場合に特に起点「を」を取るということが、この時代に意識されていたということが窺える。

おわりに

本稿では、離れる移動を表す移動動詞を2つに分け、その起点標示を中心に見てきた。

○「かる」「去る」「遠ざかる」「のがる」「のく」「離る」「別る」

・基本的には、起点以外の場所格を承けず、起点の標示には主に「を」や無助詞が用いられる。「に」「より」によって標示される場合は、動詞の意味や上接語に偏りがある。

○「落つ」「立つ」

・起点だけでなく着点や方向などの場所格も承ける。

・起点標示に「を」が用いられる場合、動詞は「出発」「退却」など、特定の意味を表すことが多い。

ここまで、「起点」という名称を特に区別せずに用いてきたが、「かる」以下の動詞と「落つ」以下の動詞では、起点の性質が異なるように思われる。前者では、主に起点標示が対格標示を担う「を」、無助詞によって行われるように、起点は必須補語であり、また上接語には、場所名詞以外にも、人、位、物、抽象的な名詞、体の一部など様々なものが現れた。一方後者では、起点は「より」「から」でも標示されるように、着点と同様に斜格であり、必須性は低い。また、上接語も場所名詞に限られていた。このように両者は性質が異なるため、前者のものを「離点」、後者のものを「起点」と呼び分けたい。後者は「より」「から」だけでなく「を」も用いられるが、動詞によって判然と区別できないものもあるため、一応は「起点」と呼んでよいと思われる。

ここまで、中古から中世の離点、起点標示について見てきたが、現代語では「その場から離れる」「そこから逃れられない」などのように離点標示に「から」が使われることは少なくない。今後は、離点標示「から(より)」の拡

大について、さらに時代を下って見ていきたい。

注1 工藤は(7)は死別と述べているが、新全集頭注に「世話してくれる人のある場合でさえ、女親に先立たれた娘は、じつに不憫なものでございましょう。まして～」とあるように、単なる死別というより、一般論として、女親というものに縁がないということを用意した表現だと思われる。

注2 検索語は、語彙素読みをそれぞれ、イデル、オチル、カレル、サル、シゾク、シリゾク、トオザカル、タツ、デル、ノガレル、ノケル、ハナレル、ヒク、ワカレルとし検索。その後、同音異義語、韻文の例を除外した。用例の所在は(サンプル ID・ページ数)のように示す。表記は一部改めた。テキストは『新編日本古典文学全集』(小学館)、『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解』(清文堂出版)を用いた。

注3 「かる」は中世には用例が見られなかった。

注4 本稿では、相手が死去することで主体から離れていくことを「死別」と呼び、移動の主体自身が死ぬことと区別する。

注5 新全集の海道記の解説には「四六駢儷体にならった華麗な和漢混淆体で、故事伝典や複雑な対句を自在に操る」とあるように、文体的な特徴も考慮する必要がある。

注6 ①大將立ちととりたまひて、御子の持ちたまへる笛をとりて、いみじくおもしろく吹きたてたまへるが、いとめでたく聞こゆれば、いづれもいづれも、みな、御手^を離れぬものの伝へ伝へ、いと二なくのみあるにてぞ、わが御才のほどありがたく思し知られける。
(20- 源氏1010_00035・④若菜下 p.203)

新全集では「みな大殿のご伝授によって、じっさいまたなくそのお手並みが優れていらっしゃるのだから、大殿は、ご自分の御才芸がどんなに無類でいらっしゃるのかを……」と訳されている。伝授されたことが時間、空間を隔てても大きく変わらず伝わるという点では、抽象的な移動の例と言えよう。

注7 ②かかるをりふしの歌は、例の上手めきたまふ男たちもなかなか出で消えて、松の千歳^{より}離れていまめかしきことなれば、うるさくてなむ。

(20- 源氏1010_00035・④若菜下 p.174)

「より」を承けた上の例は、新全集では「男たちも、かえって詠みばえせぬもので、「松の千歳……」のきまり文句以上の趣向があるわけでもないのだから」と訳されており「比較的基準」を表していると考えられる。

注8 表1, 2について、「去る」は場所名詞およびそれに準ずる例のみを挙げている。また、「所去る」という言い方が4例見られたが、「場所を変える」「譲る」という他動詞的な意味に解せるため、用例には含めなかった(③)。また、「に」を承けた例が1例見られるが、今昔物語集(巻10- 9)にも見られる孔子の逸話であり、漢文の影響が考えられるため、

これも除外した(④)。

③「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。

(20- 源氏1010_00009・②葵 p.29)

④「車は家のある所をのぞきて過ぐべし。未だきかず、家の車に去る事を」

(30- 海道1223_00009・p.54)

注9 その他、「しりぞく(しぞく)」に1例のみ起点を承ける例が見られた(検索語:語彙素読み「シゾク」「シリゾク」)。

⑤然れどもその獣生死の安否を試みようと思うたか、耳の辺、口の辺りを嗅いで見れども、死んだごとくに動かなんだれば、そこを^{しりぞ}退いた。(40- 天伊1593_00033・p.471)

注10 中世、「遠ざかる」が「に」を承けた例も上接語は人であり、使い分けの基準に合っている。

⑥下心。仁者を友にせう人は、悪い者に遠ざからずんば、必ずその名も、その徳も滅びようず。

(40- 天伊1593_00036・p.473)

注11 自他同形の「引く」も中世に退却を表す例が1例見られた(検索語:語彙素読み「ヒク」)。

⑦ここをば引いて、尾張の洲俣を防げと言うて、…… (40- 天平1592_02010・p.153)

参考文献

工藤力男(1978)「格助詞と動詞の相関についての通時的考察」『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』26

国立国語研究所(2021)『日本語歴史コーパス』<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>(2021年9月1日確認)

此島正年(1973)『国語助詞の研究 助詞史素描』桜楓社(初版は(1966))

小柳智一(2011)「古代の助詞ヨリ類一場所格の格助詞と第1種副助詞一」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版

土井忠生 訳注(1955)『日本大文典』三省堂出版

中西宇一(1996)『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院

松村明 編(1969)『古典語現代語 助詞助動詞詳説』學燈社

松本昂大(2016)「古代語の移動動詞と「起点」「経路」——今昔物語集の「より」「を」——」『日本語の研究』12-4

松本昂大(2020)「中古和文における移動動詞の経路、移動領域の標示」『日本語の研究』16-3

森本治吉(1933)「萬葉集品詞概説 1 代名詞・助詞・接頭語・接尾語」佐佐木信綱・藤村作・吉澤義則 監修『萬葉集講座 第三卷 言語研究篇』春陽堂